



Title	重度の精神障害者の地域生活を支えるACT実践の現象学的研究
Author(s)	近田, 真美子
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91888
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (近 田 真 美 子)	
論文題名	重度の精神障害者の地域生活を支えるACT実践の現象学的研究
論文内容の要旨	
<p>本稿は、重度の精神障害者を24時間365日地域という場で支えるACT (Assertive Community Treatment, 包括型地域生活支援プログラム, 以下ACTと略す) で働く医療専門職6名 (看護師3名, 精神保健福祉士1名, 精神科医2名) のインタビューを現象学的手法で分析することで, 個々の実践の成り立ちを明らかにすることを目的とした。それにより, 1960年代以降進む世界的な脱施設化の流れに後れをとる日本の精神障害者の支援を「地域生活中心」へと転換するために必要な, 地域生活支援にふさわしい専門性を追求することを目指した。以下, 本稿の概要を示す。</p> <p>まず, 第Ⅰ部では, 日本の精神医療の現状について確認し, 当事者の「地域生活中心」へと支援の転換が図れない理由について, 病院と地域という空間における患者と医療専門職の非対称性をはらむ関係性に着目した。そして, 世界的な脱施設化の流れの中で誕生したACTの概要を示し, 2002年に日本に導入された以後の実情ならびに地域生活中心への転換において必要となるACTの実践スキルに関する先行研究を確認した。</p> <p>続く第Ⅱ部では, 唯一, 日本のACT実践スキルを質的に探究した三品桂子 (2013) の研究を取り上げ, 概念化を目指す方法論と現象学的手法との相違点を示した。その上で, 本研究において個別の経験へ接近する手法に適している現象学的手法を援用した経緯について説明した。なお, 本稿では, 現象学を「目に見えない動きがもつ形を, その運動の内側に視点をとって捕まえること」という村上の定義 (村上靖彦, 2019) ならびに方法論を採用している。</p> <p>第Ⅲ部では, ACTで働く医療専門職6名 (看護師3名, 精神保健福祉士1名, 精神科医2名) のインタビューをもとに, 彼らの実践がいかに成り立っているのか, 1人ひとりの分析結果を示した。6名の実践の成り立ちは, (1) 精神科病院から出て地域で働くという経験や, (2) 重度の精神障害者を地域で支えるための関係性をどのように構築しながら実践を展開しているのか, (3) ACTの理念であるリカバリーを地域において具現化する支援という3つのテーマ (3つの章) に分けて記した。</p> <p>6名のスタッフ1人ひとりの実践の成り立ちを内側という視点から見ることで見えてきたのは, 精神症状の出現を抑えるといった地域生活の維持ではなく, 利用者のリカバリーを目指し, 彼らの主体性を回復するという主体化のプロセスに伴走する実践を展開していたということであった。まず, ACTスタッフらは, 支援開始直後から展開される, 利用者に振り回されるくらい寄り添い, 苦楽を共にする中で利用者への眼差しが変化していた。そして, 医学モデルの優位性を下げ, 人間らしさの本質や日常の良識に目を向けながら, 利用者自ら思考し, 責任を負い, 夢や希望といった自己実現を目指しながら地域で自分らしく生きることを支えていた。この利用者の主体性を回復するという主体化への支援こそが, 地域生活の維持という状態にとどめておくことから, リカバリーという状態へと方向づけていくための分岐点となっており, 結果として利用者の精神症状の安定をもたらしていた。</p> <p>終章では, 第Ⅲ部までの議論を踏まえながら, 地域生活支援にふさわしい専門性について言及した。はじめに, 支援の出発点としてのホールディングと苦楽を共にするという経験が, 利用者への眼差しを変化させ, 看護師や精神保健福祉士といった属性を超えた1人の人間としての出会いの契機となることを述べた。そして, ホールディング機能を有する支援から, リカバリーへと方向づけていくための分岐点となる医学モデルという価値の位置づけについて, 医学モデルの負の側面や人間らしさや日常の良識といった別の価値の重要性について確認し, 医学モデルの優位性を下げた精神医療という概念が内包する意味内容について検討した。最後に, ホールディングからリカバリーという一連の実践について, 利用者ならびにスタッフの主体化という側面から言及し, この一連の実践が, 利用者の地域生活を“維持”という現状にとどめるのか, それとも, リカバリーへと方向づけていくのかの鍵となることを述べた。</p> <p>日本の精神医療を地域生活中心へと転換するためには, こうした専門性を携えながら, 医療者中心ではなく利用者を中心に据えた支援体制の構築を図ることが不可欠であり, この方向性を見定める際の鍵となるのが利用者とともに行為しながら自らの実践を省察し, リカバリー概念を身体に落とし込む直接性の水準における経験である。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (近 田 真 美 子)	
(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 村上 靖彦 副 査 教 授 白川 千尋 副 査 学外委員 斎藤 環 (筑波大学 医学医療系 社会精神保健学 教授)

論文審査の結果の要旨

近田真美子氏による博士学位論文『重度の精神障害者の地域生活を支えるACT実践の現象学的研究』は、ACTと呼ばれる、重度の精神障害者を入院に頼らず地域のなかでサポートする医療組織についての調査研究である。

近田氏は或るACT実践を行う精神科クリニック及び訪問看護ステーションにおいて参与観察及びスタッフのインタビューを行い、どのような実践が行われ、実践が現代日本の精神科医療においてどのような役割を果たしているのかについて現象学的な質的研究の方法論を用いながら、おそらく日本では初めて具体的な知見をもたらした。

論文はまず著者が、新人看護師として浦河日赤病院という、患者の人権を尊重し拘束に頼らない先進的な精神科医療を推進した病院で勤務した経験についての回顧から始まる。そのあと日本の精神科医療が抱える長期入院や拘束の多用といった人権にかかわる問題を知った著者は、本論文第1部第1章で日本の精神科医療の歴史と現状を、その問題点を中心に描いている。そして21世紀に入って日本に導入されたACTと呼ばれる入院に頼らずに重度の精神病患者をサポートする仕組みについての歴史と、ACTについての先行研究を網羅的に参照する。そのなかで著者は、ACT実践の有効性を指摘するとともに、詳細な質的研究がまだ行われていないがゆえに個別性の高いACT実践の詳細な実践内容と価値が明らかになっていないことを指摘する。著者は先行研究が持つこの制約ゆえに、現象学を用いた個別のACT実践の詳細なモノグラフィーを執筆する意義を明らかにしている。

論文の大部分をなす第2部では、或るACTのスタッフ9人へのインタビューを参与観察でのデータを交えて分析している(詳細にはそのうち6人がとりあげられている)。まずこの分析には章の配置に特徴がある。看護師、精神科医、精神福祉士という順番で一見するとアランダムに章立てが構成されている。全体は、妄想と幻聴の世界のなかに住んでいるがゆえにコミュニケーションを取ることが極端に難しい重度の精神障害者へとアプローチをし、まずはその人をホールディングを確保することで安心と安全を生み出すことが実践の出発点になる。次に、患者の治療を目指すのではなく地域社会のなかでの暮らしに伴走し、さらには社会のなかで責任を負ってサポートを受けながら自律して人生を設計することができることを目指していくという実践のプロセスを示す工夫のもとに章立てが組まれている。さまざまな「実験」を試みて患者にアプローチし、薬の代わりに神社の御札を貼って妄想を抑えるというような、創意工夫に満ちた実践のなかで、スタッフと患者が関係を作っていく様子がいきいきと描かれている(くりかえすと患者はもともとコミュニケーションを取ることが極めて困難な人だとみなされてきている)。分析は、言葉づかいの詳細なポイントを微細に読み取りつつ、全体の大きな流れをつかむものとなっている。

日本の病院で必ず見られる医師を頂点とした強固なヒエラルキー構造ではない共同実践のありかたを、本論文は示しているのだ。実際、精神科医の内山医師は、そのような無意味なヒエラルキー構造から逃れるために、病院勤務を離れたことを語り、ACTの創設者であるK医師も医療の権威性をはぎとったときに残るのが日常的な礼節のなかでの対人関係であることを強調する。薬物療法や隔離やヒエラルキーが強いる医療規範を解除したところで、重度の精神障害者とともに暮らしていくという実践が機能することを本論文は丁寧に描き出している。

このとき副次的な効果として薬物の比重が下がっていく様子が明らかになり、このことは医療のヒエラルキーの解除と連動していく(ただし、外部審査の斎藤教授からは、その背景に医療者の専門性が働いているとの指摘があった)。

最終的に本論文は、ACT施設にとどまることなく、家族のみならず近隣住民を巻き込む仕方で重度の精神障害者が暮らしていくために必要なサポートのあり方を示すことに成功している。支援する支援されるというパターナリスティックな枠組みをできるかぎり解除しながら生活が成り立つための工夫、自己実現を行うところみとして精神科医療を組み直す提言をする

にいたっている。本論文は日本の精神科医療を未来へ向けてアップデートする道を提示する成果となっており、博士人間科学に値すると判断された。